特26
376

家庭教育

# 生徒の心得

元木貞雄編

明治・大正・昭和

◎巻端

或る夜作太郎の母は、極是れまでは前達の種々の昔話しなどして聞かせた後作太郎に向つて言ふやうの望み通りにいろ〳〵面白い話しをして聞かせましたが今迄はお前達に望む事があるが是非聞てもらはなければ成りからお前達に望む事があるが是非聞てもらはなければ成りの謙次郎さんは學校で行狀が一番よいといふので品行優等も褒められ朋友にも敬まはれますが何んでも人は只博く物知りたばかりでは心が卑くて人間の道が行へず自然と人に賤しまれて良い人と爲ることが出來ぬから、幼い時から行狀の方を習つて置かなければ成りませぬ、夫れゆゑ是れからヲッカさんは毎夜面白い話しの後で少しづゝ行ひの話しをしますから、お前達はよく之を聽て常によく心掛けて之を身に行ふが宜しい左樣すればお父さんや、お母さんに愛されるばかりでなく先生にも褒められ朋友其外の人

にも敬はれて自然とお前の身が貴くなる、是れが本當の褒美と云ふものであるとて次の如く行狀の話しを致しました。

## ◎朝の行ひ

先づ朝は父母に氣を揉ませず、出校の時間に後れぬやう、早く起きなければ成りませぬ、起きれば直ぐに衣服を着かへ顏を洗ひ髪を梳り先づお父さんとお母さんの前にゆき跪づきて丁寧に朝禮を爲し且其機嫌如何を候ひ目上の人にも一應朝禮をして後膳に向ひ食に就くべし若し兩親より問ふとあらば必らず跪づきて聽き愉やかなる顏つきにて答ふべし

母子對話圖





食事をするにも兩親が箸を取り食し初るを待てすべく其許しなければ猥りに親に先だちて食ては成りませぬ假へ親が默つて許して居ても「れ父さんれ先きへ」とか「れ母さんれ先きへ」とか其挨拶を述て食るものであります、而して朝飯には限ち ぬ事であるが、何でも膳に付きたる物の嗜き嫌いを云ひ、又は其物の多い少いを云ひ、又は他人の膳に付きたる物と見くらべたりする事は決して爲ては成りませぬ、又食事中無益なる話しをしたり、飲食の物をことばしたりせぬやうに、氣を付け食物は成る丈よく嚙みて嚙み込み而して長く時間の掛らぬやう食て了つて速く膳を起つべし

食事を仕舞へば直ぐに學校へ出る用意をするのであるが、其れに就ては先づ今日學校で習ふ課業は何ぞと考へ書物石板筆墨等其日課業に入用な物を遺なく取り揃へて革提又は布呂敷に納れ又出校前に猶早しと思ふ時間あれば其時間を以て何か其日の課業につき豫習するも宜し兎角する内にもよく氣を付けて出校の時間を見計らひ路の遠近に從つて何十分か早く出掛け必らず課業の始まる前に登校し決して其時間に後れぬやう心掛くべし而して其出かける時には必らず父母

の前に出で「行てまいります」と挨拶をして行くべし

## ◎出校途中の心得

さて家を出でた後學校へ行く途中にては假ひ遊び友達に遭ふても之れと遊ばず又は何か面白き物ありても止まりて之れを見て居らず滯りなく歩みて學校に至るべし、若し車又は馬にあはゞ遠く避け自分より幼き者を伴れたるときは、よく之れを扶けてつれゆくべし、雨天の時は傘はき物などをよく揃へをきて混雜せぬやう氣を付るべし扨て學校に至らば同校の教師がた及び生徒達にも立禮し氣をつけて始業時間の至るを待ち

出校途中車馬を避ける圖





報の鐘が鳴つたらば直ぐに教室に出でゝ教師に立禮し自分の席に就くの後は指圖に從つて課業を始め其時間中は謹みて教師の教ゆる所を聽き熱心に勉強して其習ふ事の外は氣を配らず教師に問ふことあらば靜かに手を擧げて尋ぬべし、決して隣席の生徒と密かに話しをしたり、外の物を弄びたりしては成りませぬ、時間終るまでは、此の通り心を專らに勉強して課業を修め時間終れば靜かに文臺の上の物を取り片づけ教師に禮して順に席を退ぞき決して遽だしく振舞ふては成りませぬ

學校はすべて幼年の兒童が成長の後、入用なる學問を教ゆる所にて其爲に設けた規則もあり生徒たる者は能く其規則にある通りを守りて違ふことなく、又教師の言ふことに背かず常に勉強正直に行ひ先生に褒められるやうに心がけ苟にも外の生徒と爭ひ暴き行ひをしては成りませぬ、此間もお向ふの源藏さんは外の兒童と何か諜がしく爭つて喧嘩をし、窓のガラス戸を毀したので、トウ〳〵先生に呵られ罰を受けたそうではないか、其外お前の學問を成就するについて、心得をくべき話しがありますから是れから其話しを致しませう

## ◎辛抱は物事を成就するの本

昔し京都に池大雅堂といふ畫かきがありましたが、此人は畫をかくことが好きで熱心に習ひ何とか畫家となりて世に名を揚げんと志しましたが、初めのほどは誰も左はど思ひませんから、頼んで描いてもらふ者もなく、活計はます〳〵貧しくなりて、難義であるゆゑ、或る時畫をかいた扇子を持つて尾張の國あたりを遊歴しましたが、扇子は一本も賣れなかつたゆゑ、近江の瀬田の橋に來て大に歎息しア、此樣に扇子が賣れないのも、必竟已れの技が未熟であるからであるのだろうとて、持て居る扇子を殘らず川へ投げすてゝ仕舞いました、此の時大概の人なら志が折けてしまつたであらうが、大雅堂は是れより京都へ歸つて、ます〳〵奮發し畫術の奥義を窮めたゆゑ、とう〳〵名高い畫家になつたと申します、故に已れに六ケ敷き課業ありて假ひ試驗に落第することあるも猶怠らず勉強すれば遂には成就するものであります

## ◎學校に於ての行ひ

今夜は昨夜のつゞきとして學校にて行ふべき事の洩れたる分を話しませう、扨書を讀み字を習ふには文臺に向ひて體を正しくし頭をまげ又は前に倚りかゝつては成りませぬ、墨にて手、顔、衣服、手本等を汚さぬやう氣を付け課業終らば書物筆硯手本等すべての物を取り亂さぬやう大切に文臺の中へ仕舞ひおくが宜しい

教師のゆるしなくして猥りに席を起つては成りませぬ、便所に行くには遽だしく走るとなく衣服をけがさぬやうに氣を付け、出でゝは必らず手を洗ひ手拭にて拭き決して衣物の袖などにて拭ては成りませぬ

食堂にて辨當を食るときは必らず食臺

の上に之れを開き腰をかけて食し飯粒など落し散さぬやうに氣をつけ食物を口に銜みながら雑談し又は食べかけて外の生徒と戯むれなどしては成りませぬ、靜かに食して長き時間を費やさぬやうに氣を付るが宜しい

遊歩場に出でたるときは靜かに運動して心を慰さめ決して狂ひ躁ぐ事をしては成りませぬ、凡て運動は身體のくすりとなり、好きな遊戯をすれば心の勞を忘れるものであるから課業にて精神が倦んだ後は思ひ〳〵に、好きな遊戯をするは宜しいが樹に登り池の縁を渉る抔危うき遊びは決してしては成りませぬ、危うき事をして怪我などするは必竟ナニ此のくらいの事はと侮る心があるから起るのであります、今其事につき話しがあります。

## ◎侮るは失敗の本

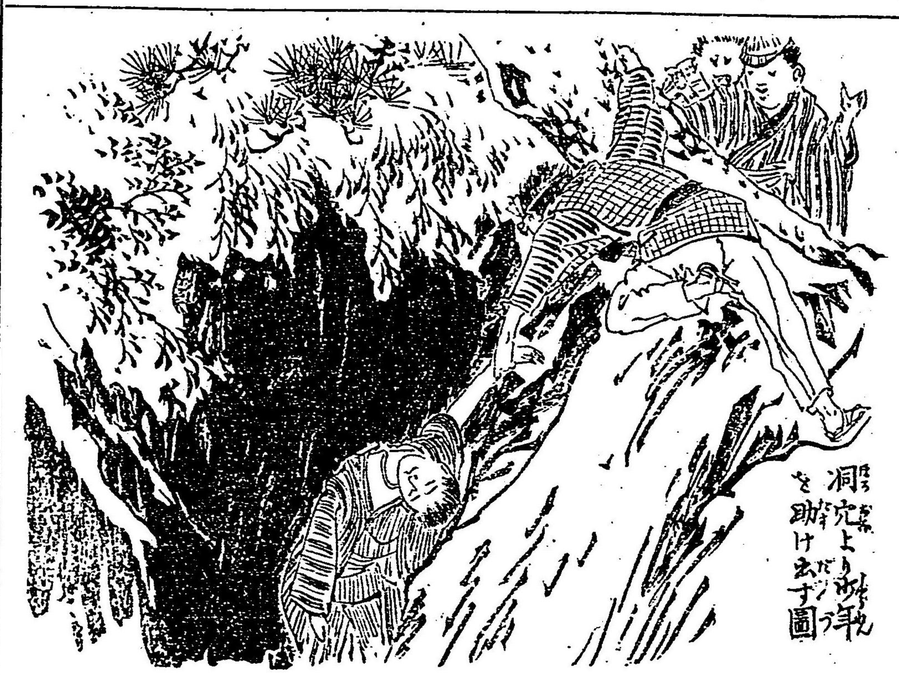
或る處に一つの大きな洞穴がありました、人々此穴には何か悪しき物ありとて誰れも恐れて這入る者はなかつたが、或る日三人の少年其穴の入口へ來てコワ〳〵窺き中が薄暗くて何となく氣味悪きを見て二人はオヽコワイと飛び退きましたが、跡の一人は自慢顔で「ナニ此位の穴へ這入れぬ者は餘程いくぢなしだ、ドウダ已れが一番這入て見せやうか」とて二人が止めるをも肯かずに、ツカ〳〵と這入りました、スルト幾ら待ても出て來ません から熟々窺ひて見ると其少年は程遠からぬ處に仆れて息が絶へかゝつて居たゆゑ二人は驚き急に近所の人を呼で來て扶け出しました、是は其穴の中の毒氣に中つたのだと申しますが、何でも自分に物を見拔く智力がなくて侮ると、こんな目に逢ひますから慎しまねば成りませぬ





## ◎父母に對する行ひ

學校放課の後は教師及び同級の生徒にも禮して退ぞき、はき物などを間違へぬ



洞穴より少年を助け出す圖

やうに氣を付けて出で途中に止まり遊ばずして成る丈早く家に歸るが宜しい父母は放課時間を知つて居て心にお前達が歸るを待ち若し其時間至るも歸り來らぬときは何か學校で過ちでもありて留められては居らぬか、又は途中で怪我でもしたのではあらぬか抔と心配するものであるから、父母が子を思ふ心は決して忘れてゝ成りませぬ

我が家に歸りたらば必らず父母の前に至り跪まつきて一禮し、歸りたるを告げ、机に向ひて其日學び得たる所を幾回も復習しなければなりませぬ、而して後我が家にても戸外にても遊ぶが宜しい、若し遠き處へ遊びにゆくときは、必らず其行かんと思ふ處を告げ許しを受けて行かなければなりませぬ、若し告げずして遠き處にゆき、父母がお前の居る處を知らざれば何處に何うして居るかと心配し、諸處を尋ねまはるなど、無益に苦勞を掛るとあるものであるから假ひ父母が承知の遊び先きにて友達に誘はれる事あるも父母に告げざる處へは決して行ては成りませぬ、兎角父母の心を安んずるが大事でありますし

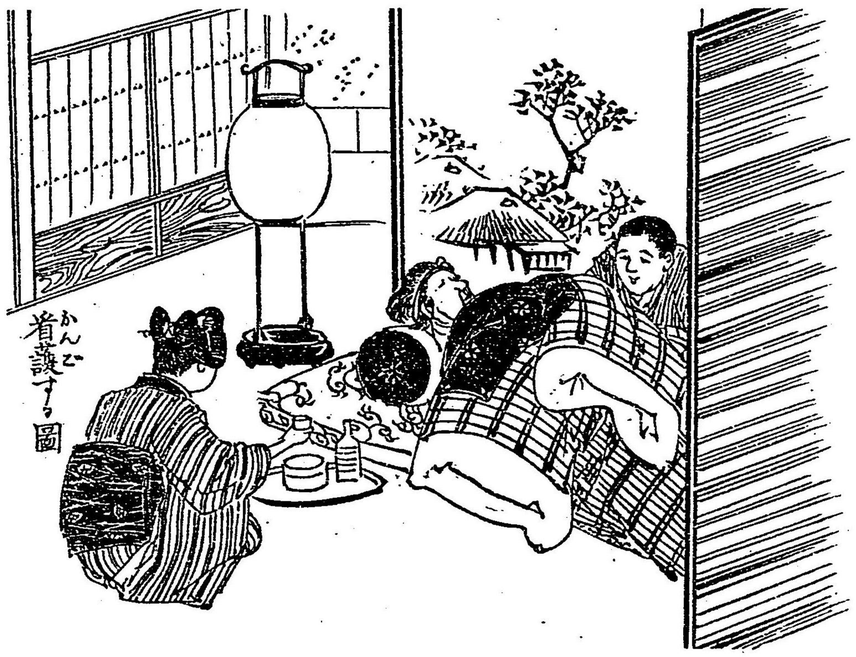
父母若し病氣である時は必らず家に居て藥を侑め始終病氣の容體を候つて食物





の口に適ふものを問ふて侑め又は身體を撫でさすり面白き話し抔して其心を慰さめ何くれとなく看病に心を盡して奉養を專らにし、苟にも意に背きて勝手に側を離れ遊びさはぐなどの事をしてはなりませぬ

父母が子を育てるには一方ならぬ苦勞をするものであるから、子たる者は常に其恩を忘れずして之れに報ゆる事を心掛け常に之れを敬まひ事へて孝の道を行はねばなりませぬ、故に父母の命にはよく順ひ何事に限らず勞を厭はずして、まめ〳〵しく行ひ苟りにも其云ふ事に口答へをしたり、命ずる事を忌がつたり



看護する圖

せず、呼べば直ぐに、ハイと應へ、言ひ付ける事あれば氣輕に起ちて速やかに用事を達すべし、父母の命に違ひ意に背きて怒る心を起さしむるは子たる者の大不孝であります

三度の食事其外茶、菓子等の飲食に於ても必らず父母を先きにして己れを後にすべし、例へば新たに茶を煎たときは先づ父母に進め、て後ち自分が飲み、膳に向つた時も父母先づ箸を取て食べ初めてから自分か食するを當然とす、若し殊に父母の嗜める食物あるときは已れの食する分を減しても之れを父母に侑むるが宜し、若し客が來て父母と共に飲食することあるも父母の命なきうちは其席へ出でゝはなりませぬ

父母より後刻又は明日爲すべき事を命ぜられたるときは、よく心掛けおきて必らず忘るゝことなく其事を行ふべし、言ひつけられた事を等閑に過ごすは父母の命を輕んずるの罪あり

平生父母の嫌ふ事を爲し又は語りてはなりませぬ、例へば父母は清潔を好める性質であるに手足を穢くし鼻汁をたらし又は父母の起ち居する處に汚れた鼻紙抔





を棄ておく等の事を爲し又父母の容貌等に醜くい所あるに他人の之れと同じ醜くい處を語るは宜くありませぬ、皆父母の感情を惡くする行ひであります

父母に言ひ付けられて買物をするにも買て歸つた時には必らず金錢の遣ひ方を明らかに申さねば成りませぬ、故に買物先きにて代價を拂ひ釣り錢を受け取る時は、よく細かに勘定をなし、間違いなきを認めて歸るべし、若し品數多くて覺へ切れぬときは書き留めおくも宜し、其外父母の爲に使いに遣られたときは、必らず途中に止まりて遊び、又は止まりて物を見たりする事なく、成る丈速く使ひ

の用事を濟ませて歸らねばなりませぬ、若し思ふより長き時間を費やして歸るときは父母が案じるばかりでなく、用事の次第によりては、大きに不都合な事が出來ることあります

父母に金錢衣服其外の欲しき物を乞ふには必らず父母の分限を察して之を望み決して其力にて能はぬ物を望んではなりませぬ、父母が一家の暮しを立るには日々に多くの入費が掛るものであるから、父母は日々に其飲食其外の慾に費やすべき金錢を儉約して、其れでもつて子供を學校に上げ學問をさせる入費を拂ふのであります、夫れゆゑ若し父母の取前が少ないときは彼是の入費を拂ふに仲〳〵骨の折れることが多くあります、是れが父母の分限といふものであります、子たる者は常によく此分限を察して無理なる事を父母に望んでは成りませぬ

今夜は都合によつて少し話しが長くなつたが兩親に對する行ひは是れで止めにして次は別なお話しに致しませう

## ◎兄弟に對する行ひ

お父さんやお母さんに對する行ひの事は已に前の話しにて、粗ましすみましたが、





猶其外の人々に對しての行ひ方が澤山ありますから、之れを聽てもらはなければなりませぬ、扨て今假りにお前達のお祖父さんや、お祖母さんがあるとせよ、祖父母は何れもお父さんとお母さんの親にて、お前達のためには父母よりも一段緣が遠くなるけれども此家で一番高い目上のお方であるから之れに對しては矢張り父母と同樣の禮を以て事へなければなりませぬ、其外をば父母につゞて敬まふが宜しい、又父母の友達あれば矢張り父母と同樣の禮を以て事へるが宜しい

兄弟姉妹は同じ胞の血筋を分けたもの

幼子父母に事へる圖

であるから互ひに和らぎて睦しくし何事にも助けあふが人の道であります、兄姉はつねに弟妹をあはれみ、苟にも之れを侮り困める抔の事をしてはなりませぬ、弟妹は兄姉の言ふ所に從がひ決して之れにさからふてはなりませぬ、兄姉は長者として我が目上であるから門を出入りするにも又は席に就くにも必らず之れに先を讓り己れは後れねば成りませぬ、或る書物に「徐かに行きて長者に後るゝ之れを弟といふ、疾やかに行きて長者に先だつ之れを不弟といふ」とあります、是れ兄姉を敬ふが弟妹たる者の道だといふ事であります

兄弟姉妹は家に居るにも、自然と男女の差別を立て餘りなれ〳〵しくせぬ樣にしめい〳〵所持の物を別に保ちて、みだりに用ひぬやうにするが宜しい

兄弟は互ひに其過ちをひろひて謗りがましく父母に告るは宜しからず、若し弟に惡き事あるときは親切に其惡きわけを說き聞かせ、どこまでも之れを諭して止めさせるが宜しく、又兄にわろき行ひあるときは弟は靜かに諫めて之れを改めるやうに力を盡すが宜しい、殊に來客などある時は兄弟互ひに爭ひて喧嘩する事を慎しみ兄弟仲あしき狀を他人に見せては成りませぬ



◎世の中に得難きものは兄弟ばかりなり

或る田舍に百姓某といふ者あり兄弟互ひに一の田地を爭そひ兄も弟も其田地を己れの物だと言ひ張つて、すこしも讓らず幾年も互ひに爭そつて居る內に、どちらにも加勢する味方がふへて百人許りに成り、只爭論が烈しくなつて、何日止むべき樣もなかつたが、ソコデ其縣の知事が爭論の主なる二人の兄弟を召び出し諭して云ふやう「世の中にて得がたい物は兄弟ばかりで田地は何日でも求めらるゝ物である、そうであるに汝等假ひ田地を得らるゝとも之れが爲に大切な

兄弟一家睦合圖

兄弟を失ふであらうが、サア其時は二人ともどうぢや」とて涙を流して言はれました、ソコデ其席に居ならびたる双方の證人たちも皆其言葉に感じて涙を流さぬ者はありませなんだ、スルト兄弟は大きに後悔して前の爭ひのよからざりしを悟り此後は屹度思ひなほしませうとて退き、十年の間不和であつた兄弟が、トウ〳〵同じ家に歸り睦ましく暮すやうに成つたと申します

此の通り兄弟は大切なものであります から、常に仲よくしなければ成りませぬ、ついては同じ一家に居るうちは、朝晩たがひに機嫌をきゝ、外へ出るにも内へ歸

兄弟事説論鉄
相爭ふの因て大
悟を非
る圖



つた時も互ひに告げあひ、又病氣ある時は殊に其安否を尋ねて助け合ふが宜し、是れについて又感心な話しがあります

## ◎操の堅きと松栢の樣である

或る時支那の減寧といふ處で大そうコレラ病が流行り庚衰といふ者の兄二人まで病みて死にました、其上次の兄の毘と云ふ者も亦同じ病に罹りて殆んど生命が危くなりましたが、コレラ病の勢ひはなか〳〵熾んであつて、毎日死ぬ者夥だしいゆゑ、毘の父母兄弟は皆怖れて遠い處へ逃げて病を避けました、然るに衰獨り病み苦しめる毘と共に留まりて逃げないから、父母を初め外の兄弟も是非一しよに逃げろと勸めましたが、衰は「わたくしは生れつき病はすこしも怖くはありませんから」とて、固く辭してゆかず、晝夜毘の側に居て看病して眠らず、又死んだ二人の兄の棺を撫でゝは哀しみ、斯樣にして怖ろしき病が蔓ほれる中を物ともせず凡そ百日許りの間兄を看病して居ましたが、やうやくコレラ病も歇みましたゆゑ、家族の人〳〵皆歸り來り毘は全快して衰も恙なくてすみました、ソコデ或る人は之を評して衰は眞に人が守るとのできない所を守り、人の行ふとのできない所を行つた者に

て其兄弟を思ふ操は丁度松柏が容易に枯れぬと同じ事で其のため悪病も感染らなかつたものであらうと申しました、何んと感心な者ではありませぬか

## ◎親類に對する行ひ

親類の人には長幼の別ちなく常によく親しむべし、父の族を本族といひ、先祖より傳はれる血筋であるから殊に厚く親しみ、母の族は父の族につぎて親しむが宜しい、をぢをばは父方と母方にかゝはらず、幾んど父母に對すると同じ禮を以て事へ、いとこは其長少にしたがひ、兄弟に近き禮を以て親しみ常に疎遠ならぬやう互ひに往來し、又は手紙のとりやり抔して消息を通じ起居の模樣を知り合ふが宜しい、居る處遠く隔たりたりとて必らず疎遠に過ぎては成りませぬ、なぜといふに親類は我れと同氣にて何事にも助け合はねばならぬ仲であるからであります

若し我が財に餘りありて親類に困窮の者あれば必らず之れを憐れみ幾分を惠みあたへて救ふが宜しい、財とは金錢其外日々の暮しに入用な物をいふ、されども人の財は必らず何日も餘りあるものでないから常に心がけて我が身に費やすものを儉約し前以て備へおかねば、之れを救ふともできませぬ、故に金錢を以つたら多





少に拘はらず、無益に遣はずして之れを蓄はへおき人を助くる事に遣ふやう、心掛けるが宜しい、昔し疏廣といふ人は官に勤めて功があつたゆゑ其褒美に澤山の黄金をもらいました、スルト疏廣は難澁な人を悦ばせるは此時なりと直ぐに辭職して故郷に歸り親類そのほか故き知合ひにて困窮な人を大勢招き集め其黄金を殘らず賣り拂つて酒食を馳走し家財を買ひ與へなどして大きに其人々を悦ばせたと申します、斯く善を行つて怠らざるときは己れもいつか慶いを受けることがありませう

いとこ抔の中に、わろき行ひの者あれば

貧窮親戚と賑はす圖

懇ろに之れを敎へ戒しむるが宜しい、併し生れつき頑愚の者は何ほど敎へ戒しむるも心を悛むることなきものである、若し强てたび〳〵戒しむれば却つて心にさかひ、遂に不和となるの本であるから、一二度戒しめても、聽かなければ、あきらめて言はぬ方が和平を保つによろしくありませう、昔し堯といふ聖人に丹朱といふ不肖の子があつたも、つまり天性は敎へてもなほらぬからであります

## ◎友達に對する行ひ

人に交はるには友を擇ぶべし、友は其友の德を友とするので、我が善行を益するが爲である、故に朋友に交はるには己れ富貴の子なりとて隔てを爲さず、假ひ貧賤の子といへども、賢き者あれば求めて是れと交はり、互ひに心を打ちあけ、信實を盡して善行を勵みあひ、若し善からぬ行ひあれば親切に忠告し、可かざれば捨ておくが宜しい

されども之れに交はるに相當の敬禮を失はぬやうにすべし其姓名を呼ぶにも言葉をつかふにも餘り狎れ〳〵しく侮慢なるは宜しからず、己れ狎れ〳〵しくすれば彼れも狎れ覺へず侮慢無禮の言語動作にわたりて不和となることがありますから、氣を付けねばなりませぬ

されば朋友の訪ひ來るあれば、己れみづから出でむかへ、一禮したる後、先だちて之れを席に導き、之れと對話するにも言葉を丁寧につかひ、よく前後を考へて彼れの感情を傷はぬやうに氣を付け、己れの自慢がちなる事や、其友の恥辱となる事など言ひ、又は他の朋友の宜しからぬ事を謗り語りてはなりませぬ、若し二人以上の友に對しては、其中の一人のみに長談せず、孰れへも同じやうに對話するが宜い、若し己れの氣に入りたる友にのみ話しをするときは、其外の友は快からず思ひて交りを破るやうに成るであり

ませう、凡て人に交はるには互ひに言語動作を遠慮せねば成りませぬ、其遠慮する所に禮儀があるのである

我が家にて朋友と話しをするも、又は朋友の家に往きて話しするも我れより長談せぬが宜い、若し先きの友が長談するときは、勉めて之れを聽き、その中に益ある事あれば取るが宜い、されども漫りに他人の是非や政事の可否などを評するは少年に似合はしからぬ輕々しき所爲であるから、互ひに愼しまねばなりませぬ

朋友自身が忌む事は勿論、其父母兄弟等のために忌むべき事は成る丈愼みて語ることなく、又我が父母兄弟等の秘密なる事は語らぬが宜い、若しわが話し先方の忌む所に渉れりと思ふときは、直ぐに言葉を移して他の事を語るやうにすべし

朋友と伴れ立ちて歩くときは、威張れるやうに腕を振り、又は高聲に談笑してはならず、又途中にて惡少年にあひ、喧嘩を仕かけらるゝとも、決して止まりて相手にせず勉めて情をこらへ、默つて過ぎゆくべし、若し緣日祭禮など衆人の込み合ふ場所に至りたるときは朋友を見失はぬやう人や車を避け、包みなど持つときは拐兒抔に取られぬやう氣を付くべし、所持の金錢にて玩具抔を買ふは宜しけれども、決し

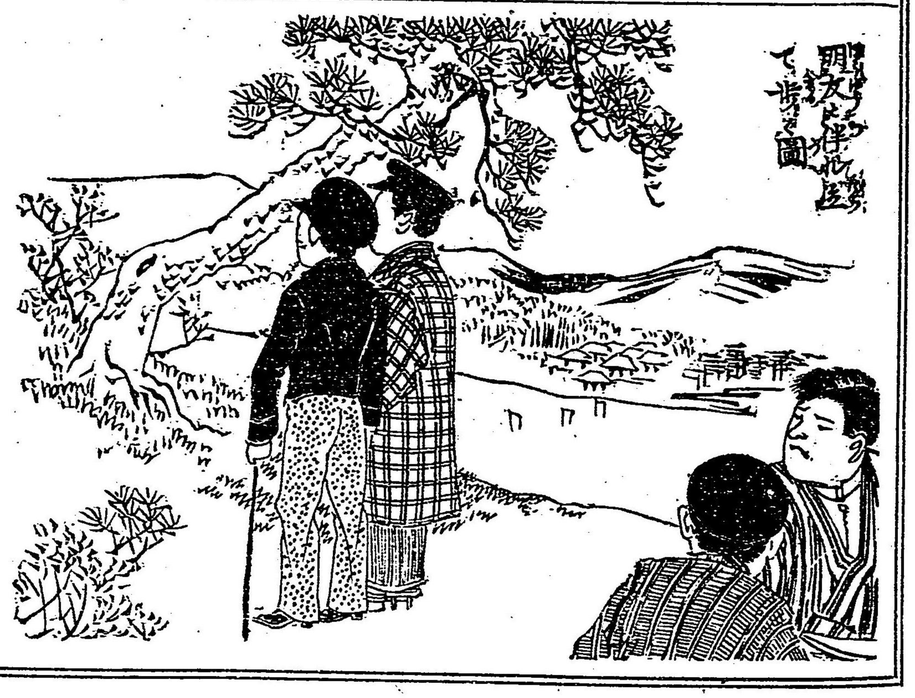




て茶店、飲食店等に立寄りてはなりませぬ、又途中車夫などの爭鬪又は醉狂者あるときは必らず遠くこれを避け決して侮りて其場所に近づいては成りませぬ、大丈夫と侮りて思はぬ怪我をするものであるから

## ◎危うき處へは近よるなかれ

むかし常陸の國に塚原卜傳といふ劍術の名人がありました、或る日多くの弟子の中で一番すぐれた弟子に劍術の極意を授けやうと思つて居たところ、一番弟子の某が路傍に繫いてあつた馬の後ろを通りかゝると馬はゝねましたが、某は



ヒラリと飛びのきましたゆゑ、蹴られませなんだ、之れを見て居た人は、其早業に感心しましたが、卜傳は之れを聞て「それでは、まだ極意はゆるされぬ」と申しました、ソコデ弟子共は不審に思ひ「それなら先生はどうするか試して見よう」とて、無類のはね馬を門外の路ばたにつなぎおき、卜傳を宅に招きました、然るに卜傳は其處を通る時馬の後ろを遠くよけて行きましたゆゑ、馬は少しも驚ろき跳ねず、弟子共の試しは無益になりました、其後或る人が「なぜ先生は、某の早業をお褒めなさりませぬか」と問ひましたれば、卜傳「さればサ、其の飛びのきたるは、業のきゝたるやうなれども、全體馬ははねるものだといふ事を忘れて、うかりと側を通つたのは、油斷と申すものぢや」と答へたそうだが、凡て怪我は油斷して、うかりと危うき處へ行くから起るのであります、幼年の時は兎角物事に考へがまはらぬものゆゑ、よく父母が言ひつけおく事を守らねばなりませぬ

## ◎禮儀の仕方

人は幼年の時から禮儀を習ひおくべし人として禮儀を知らなければ禽獸に近し、禮とは人を敬ふ仕方を爲すことにて、人には尊きと卑しきと長者と幼者とあるゆゑ、





おの〳〵其人に隨つて禮を輕くすると重くするの差ひがあります

禮には立禮と坐禮の二つあり、立禮は途中にて人に遭つたとき、又は諸役所、學校等のやうに坐禮を行ひがたき處で行ふものであり、坐禮は、すべて日本造りの家で行ふ禮儀であります

立禮には最敬禮と敬禮ありて最敬禮は帽を脱ぎて、左りのわきに挾み腰をかゞめ右の手を膝にあてゝ拜するなり若し帽を被むらぬときは、たゞ腰をかゞめ兩手を腰にあてゝ拜すべし是れは最上等の敬禮ゆゑ特り我が國君なる　天皇陛下を初め奉り皇室の御方に對して行ふ

禮儀である、其外尊長の人に立禮をするには腰をかゞめ、兩手を膝頭まで下げて拜し、同輩には膝の上まで下げて禮するなり、若し途中にて尊長の人に行きあふときは、其右の方に避けて暫時立ち止まり、兩手を膝頭まで下げて拜し同輩に行きあふときは、其左の方へ避け兩手をさけて敬禮すべし

椅子に倚れるとき、尊長の人來れば、椅子を離れて其傍らに立ちて禮し、同輩には椅子の前に立ちて禮すべし、椅子に倚るには、兩手を正しく揃へて牀につけ、椅子を動かし又は腕組等をしては成りませぬ

坐禮は兩手を下につき俯して頭を席に着け禮を爲す事なれども尊長の人に對して坐禮を行ふには下に突きたる兩手を一處に寄せ其上に頭の着く程さげて禮し、同輩には兩手の間五六寸ほどあげ、下より二三寸の處まで頭を下ぐべし、凡て人に禮するとき、其人坐せば坐して禮し立たば立つて禮するが宜しい

坐すにも起つにも靜かにして遽だしくなさず、兩手を膝に置き、歩むには體を前に屈めず、後ろへ反らず、程よく直立にして、靜かに進み決して驕りたる體にて、大股に歩み、又は足音高く歩むべからず、殊に人の前を過ぐるときは、一禮して腰をかゞめ

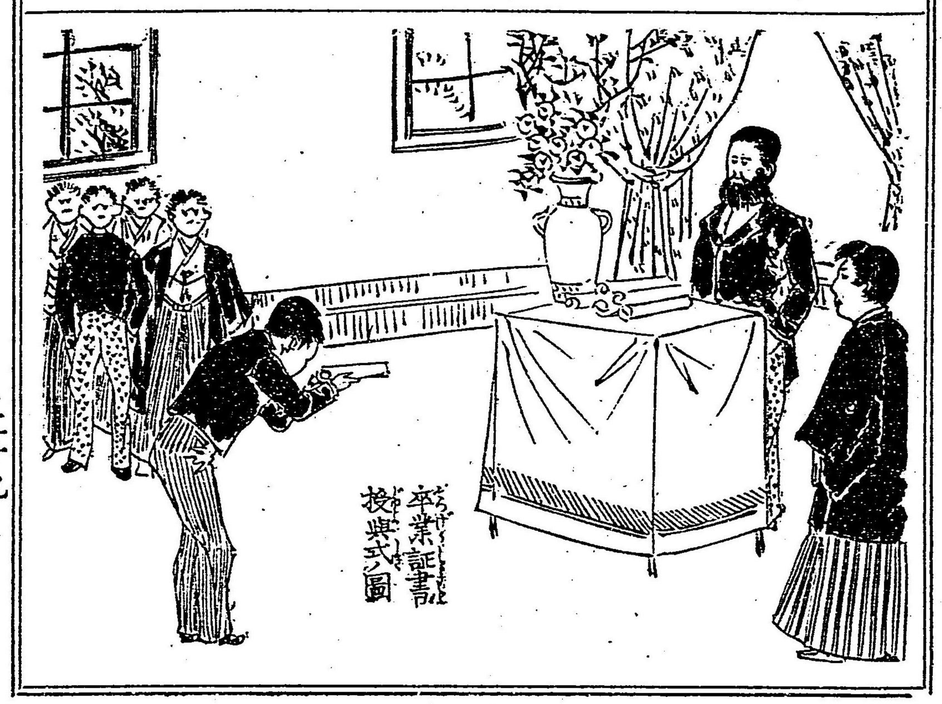




靜かに歩むべし

學校にて卒業證書又は賞與品を受くるには先づ卓より三尺許りの處まで進み、兩足を揃へて一禮し、尚ほ進みて右の手に左の手を添へて受け、二足程退き、證書ならば披き見て疊み一禮して退くべし

扱是れまで話した行儀の事は皆幼年のお前達が心得て居て行はねばならぬ人倫の道でありますが、尚ほ官位ある人は皆われ〳〵の爲に大切な政事を行ひ事務を執り、又は保護をする職分であるから、之れに逢ふ時は必らず尊びて相當の敬禮を行はねばなりませぬ、例へば天皇は國家無上の至尊であるから、御通行

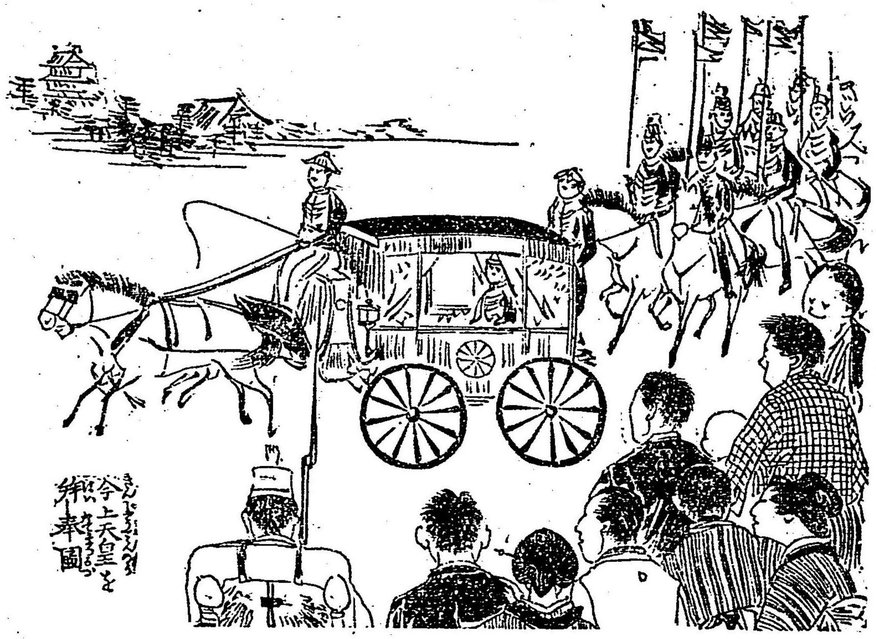


卒業証書授與式ノ圖

を見奉るときは必らず最敬禮を行ふは勿論皇后、皇太后、皇太子、皇女を見奉る時も同じ敬禮を行はねば成らず、其外皇族大臣より府縣知事、郡區長、町村長等に至る迄凡そ公務を取り扱ふ人に逢はゞ必らず路を讓りて敬禮し、其外巡査憲兵、兵卒と雖もみなわれ〳〵を保護する職分の人であるから、無禮なく路を讓らねばなりませぬ

## ◎禮は和を以て貴しとす

右の通り作太郎の母は毎夜打續きて懇ろに兒童が行ふべき道を說話して敎へました、誠とに賢母と稱すべき婦人であります、就ては茲にチョット一言しておく事があります、一體禮儀といふものは、堅くるしいものでありますから和といふものがなければ、只窮屈にばかりなります、ソコデ「禮は和を以て貴しとす」と申して堅くるしい中に和らぐ所があるので、丁度よく禮義が行はれます、例へば人の宅へ往ても先づ玄關にて禮義正しく辭を陳べ、奥に入てから、隨分和らぎて打とけた話しをし、歸る時には亦禮義たゞしく其日の禮をのべて歸れば、是れ始めと中と終りの愼み方と云ふもので、何ほど心やすき朋友の處へ往つても禮義は亂さぬやうにし、而して其中に和があるやうにするが宜いと、或る人が云はれましたが、眞に好き解釋であります



今上天皇を拜奉圖



家庭教育

# 生徒の心得

終

## 各府縣大販賣所

| | |
|---|---|
| 大阪市 | 梅原龜七 |
| 仝 | 柳原喜兵衛 |
| 仝 | 松村九兵衛 |
| 西京市 | 梅原支店 |
| 熊本市 | 長崎次郎 |
| 名古屋 | 川瀬代助 |
| 仝 | 三輪文次郎 |
| 信洲長野 | 西澤喜太郎 |
| 仝 松本 | 水琴堂爲吉 |
| 仝 | 松榮堂榮吉 |
| 仝 上田 | 西澤支店 |
| 野州宇都宮 | 田中正太郎 |
| 仝 | 高木正々堂 |
| 下總古河 | 高木文正堂 |
| 武州川越 | 菅間定次郎 |
| 北海道札幌 | 萱間左右太 |

明治二十六年四月十日印刷
仝年仝月十五日出板

正價金八錢

發行兼板權所有者 榊原友吉
日本橋區若松町廿一番地

編者 元木貞雄
麹町區御舟蔵前町卅三番地

印刷者 田中正造
神田區錦町三丁目一番地

府下販賣所

| | |
|---|---|
| 浙大阪町 | 小林喜右衛門 |
| 大傳馬町二丁目 | 長島分店 |
| 南傳馬町二丁目 | 目黒支店 |
| 室町 | 杉本七百丸 |
| 通油町 | 水野慶次郎 |
| 通一丁目 | 大倉書店 |



版權所有

版權登錄

048521−000−9

特26.−376

# 生徒の心得

元木　貞雄／編

M26

BEI−0063